

透析専門介護・医療施設における腰痛の実態と対策

社会福祉法人照善会 こくら庵

医療法人衆和会 長崎腎病院

○東村清貴 小森優也 福本 駿 小島千佳子 小松利恵子 林 涼子 上谷しのぶ 船越 哲

【目的】

一般企業の腰痛有病率は年々下降しているが、介護・看護労働者では逆に増加しており深刻な問題である。今回、当施設における就業起因腰痛の実況を調査し、これへの対策を検討した。

【対象・方法】

当法人の介護職 21 名、看護職・ME154 名にアンケート調査を行い、組織全体での取り組みを試みる。

【結果】

腰痛保有率は介護職で 71.4%、看護職・ME で 75.0%と、一般病院の平均 65%を上回る状況であった。痛みの頻度は介護施設と透析スタッフで「ほぼ毎日」であり、自覚する要因では「不自然な姿勢」が 54%と、「力仕事」の 44%を上回っていた。このような腰痛の対策としては、3 割が各自で腰痛ベルトや腰痛体操を実行していたものの、我流で行っていた。これに対し、各部署からのメンバーで構成される「腰痛対策チーム」を立ち上げ、ノーリフティングの概念を学習し、合わせて福祉機器や補助器具などのハードウェアの購入を検討した。

【考案】

透析関連施設では、スタッフ側の要因として中腰の穿刺作業や止血業務、患者側の要因として身体能力の低下のための腰痛が推定される。今後は各部署における腰痛の原因を解析し、抜本的で継続的な腰痛予防システムを構築したい。